

國學院大學學術情報リポジトリ

コメント(平成二十一年度國學院大學人間開発学会第一回大会國學院大學人間開発学会設立記念公開講演会・シンポジウム人間開発学研究の胎動--大学の行方を見据えて) --

(公開シンポジウム人間開発学の樹立に向けて--展望と課題)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奈須, 正裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001176

私の大学はカトリックの学校で、宗教と人間、そして教育と
いうことを、常に研究、教育の視座として大切に扱っていき
ようとしています。私自身は信徒ではないのですが、だからこそミッ
ション・スクールに勤めさせていただく中で、宗教という問題
が教育とか研究を考える際に、とても重要な視点なんだと、む
しろ強く思われました。そして日本は特に戦後、宗教を教育
や研究から断ち切ってきた、ということがあるんじゃないか。

でも特定の宗教ということではなくて、何か宗教的なもの、絶
対的なもの、スピリチュアルなものというんですかね。そう
いうものと私たちの関係性ということ自体は、人間について考
える際、避けて通れないことじゃないのかなと、むしろ考えて
いる次第です。

その意味で、本学は、私どものようなカトリックの学校とま
た違ったお立場や問題意識なり角度から、宗教性や宗教的なる
もの、これは何も神道ということに限らなくてとお考えいた
きたいのですが、それらを人の教育や、人間や社会の研究を進
める際にどう位置づけ考えるかという現代においてこそまずま
ず重要になってくる問題を、深く追究できるのではないかと思
うのです。また、私たちのようなミッション系の大学と一緒に、
研究を深めあい、議論の機会を持つといったことも、お互いに
とって、さらには今はそういったことに関心を抱いていない研
究者や大学にとって建設的なのではないかと考えるのです。そ
れは実は、戦後の一つの学問の在り方や、大学の在り方を、意
外と面白い所で動かす契機になるんじゃないか、という風に考
えております。

すみません、まとめられませんけれども、こんなところで私の

感想ということにさせていただきますと思います。

※

《討議の記録》

登壇者 田沼茂紀 柴崎和夫 安野功 一正孝 原英喜

奈須正裕

司会 太田直之

奈須正裕氏からのコメント終了後、五名の発題者と奈須氏を
交えた討議が行われた。最初に各発題者より奈須氏のコメント
に対する再コメントがなされた。

まず田沼氏より、人間開発学を評価するのは、個人やその個
人の生き方を見る周囲の人々であつて、長期的スパンで見
ていく必要があること、また、人間開発学とは、個人が良く生きる
ことを実現するための人間力を導き出すものであり、こうした
人間を導き育むというために、大きな意味での教育学をベー
スとしながら、隣接する学問を収斂していくことが必要であるこ
と、などが述べられた。

次に、柴崎氏は、自然科学的に考えた場合の人間開発学樹立
の難しさ、個別記述から万人に共通するものを抽出することの
難しさを改めて指摘した上で、困難ながらもそれを試みるのが
教育や教育学であるとの考えを述べた。また宗教の問題につ
いては、迷信やスピリッツは科学的には証明できないが、科学は
これを信じることを否定するものではなく、信じる人の立場を
尊重するのが科学的立場であること、現代の社会や教育の中
ではこうした視点が欠けていること、などの指摘があった。

安野氏からは、これからの教育の中核になる人には、学習指

導要領や中教審答申といった教育の現状を知りながら、これをクリティカルシンキングすることのできる力が求められること、宗教と教育の問題については、本学にはこれまでの実践的な取組の蓄積があり、これをどう活用するかを明らかにすることが、本学会の大きな役割になること、といった展望が提示された。

一氏は人間開発学樹立のための諸学の共同という点につき、これを実現するには各人の専門領域を無視するのではなく、それぞれの専門性を活かしながら一つのテーマに向かってチームを組んでいくことが重要であり、教育者としても研究者としても、お互いに響き合い共に取り組んでいく「響同」の視点が重要であると指摘した。

原氏からは、教育において人間を総体として捉えること、特に身体に注目することの重要性について、今後は脳科学の分野などで次々に明らかにされている新たな知見を、実際に生きている人間に役立つように、上手く活用していくことが重要であるとの発言があった。

また、司会より宗教と教育との問題について、人間開発学部では建学の精神である神道精神に基づいた伝統文化理解と、これを基盤とした人間力の育成を企図したカリキュラム構成がなされているとの補足説明があった。

続いて会場からの質疑に移り、まず本学部健康体育学科の木村一彦教授より、人間開発学部の教育の中で求める学生の最高水準というものを、個と全体との関わりの中でどう考えるかとの質問があった。これに対しては、柴崎氏より最高という判断は実は個人の認識の中にあって客観的に定義することは難しいこと、また個と公に関しては、個人の考えや行動は社会の求め

るところに大きく左右されており、学生にはこれを自覚した上で自ら考え行動する力を養ってもらいたい、との考えが述べられた。田沼氏からは、自己の内なる目を形作ることの大事さが述べられ、これを育成するためには、まず他者と関わり耳を傾けること、次に自分を表現して外界からのリアクションにより自分自身を認識すること、さらに討論を通じて様々な知見を得ること、が重要であるとの指摘があった。

また本学部健康体育学科の植原吉郎教授より、日本の伝統的な身体文化である武道が教育に果たす可能性についての質問がなされ、奈須氏より武道教育による徳性の涵養といった部分について実践を深めてもらい教育現場にフィードバックしてもらいたいこと、安野氏より武道を含めた伝統文化の中には稽古や付度といった日本的な教育の在り方が存在しており、こうした点を究明し発信していく必要があること、などが述べられた。

最後に、司会より新富康央学部長に発言が求められ、新富学部長より人間開発とは従来の子供観や教育観を捉えなおす営みであり、そこから真の学際的な研究が生まれ、教育と研究との一体化が図られていくものであるとの展望が述べられた。

以上紹介した他にも多くの議論があったが、紙数の都合により残念ながら割愛させていただいたことをお断りしておく。

当日は約一五〇人もの聴衆に恵まれ、大変活気ある討議の場を持つことができた。長時間にわたりお付き合いいただいた参加者の方々、また事前準備段階でご協力いただいた大学関係各位に、この場を借りて篤く謝意を表したい。

(文責：太田直之)